

佐土原キリスト教会 20123年8月6日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章5節

説教題：柔和を生きる祝福

私は学生時代、子供会研究会というサークルに所属していました。子供会のサークルですから、子供の遊びも研究します。ある時、紙で作った刀で相手を叩くようなゲームを皆で練習したことがありました。私も何の気なしに参加したのですが、相手から叩かれた時、瞬間的に「叩かれっぱなしはない」と思って、我を忘れて相手を叩き続けまし。相手は後輩でしたが、「吉行さん、止めて下さい」と、驚いた表情で私を見ました。非常に恥ずかしい経験ですが、でも私の本性でしょう。今日の御言葉は「柔和な者は幸いです。その人は地を受け継ぐから」(5)という御言葉です。私は「柔和な性根は持っていないようです。皆さんはいかがでしょう。

「柔和な人」とは、どういう人でしょうか。「柔和」、国語辞典には「性質や態度がものやわらかいこと、厳しくなく穏やかなこと…」とあります。対人関係で言えば「ギスギスすることのない温和な人」、「人間関係の中で感情や行動を穏やかに制御できる人」、「どこかでゆったりしている人」、そういう人だと言えるかも知れません。「新約聖書」はギリシャ語で書かれましたが、ギリシャ人は、この言葉の意味をこう考えたようです。「『人との交わりで粗野なこと、怒りっぽいこと、力づくで押しまくること』、そういうことをしないこと。したくなる心が起こっても、それを抑えることが『柔和』だ」。あるいは「人とのつき合いで不愉快なことをされても、すぐに怒りに燃えて仕返しをしないこと、ゆっくり反応することが出来る、それが『柔和』だ」と考えました。

私達はどうでしょうか。例えば、私達は神様の前で「神様、私は惨めな罪人です」と告白をすることが出来ます。では、この礼拝が終わった後、ある人があなたのところにやって来て、「あなたは本当に惨めな罪人ですね」と言ったとしたら、私達はどうでしょうか。穏やかにしていることが出来るでしょうか。「柔和さ」というものが良くテストされるのは人との関係だと思えます。神との関係では認められることを人との関係では認められない。そこに私達の罪というか、自分が「柔和でない」ことに気づかされるということがあるのではないのでしょうか。

聖書は「柔和」について、どのように語るのでしょうか。例えばモーセという人がいます。イスラエル民族を奴隷の地エジプトから脱出させて、40年間に渡る困難極まりない砂漠の旅を導いたのがモーセです。「聖書」はそのモーセについて、「モーセはその人となりの柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」(民数記12:3)と記します。人々を導いた困難の中の強い意志、そこに伴う忍耐、怒りのコントロール、人をひきつける謙遜や寛容。恐らく「聖書」の言う「柔和」は、単に「柔らかい」というだけではなく、そのような「人としての成熟した姿」を指すのだと思えます。

しかしそれだけではない。「詩篇」の中に「柔和な者は幸いです。その人は地を受け継ぐから」(5)、この御言葉の下敷きになったような御言葉があります。「詩篇37篇11節」：「貧しい人は地を受け継ごう」(11a)。この「貧しい人」という言葉ですが、「口語訳聖書」は「柔和な者は国を継ぎ…」(11a)と訳しています。「イエス様が『柔和な者は』と言われた時、その言葉の背後にも『貧しい者は』というニュアンスがあり、イエス様のお心には『詩篇37篇』があつたであろう」と学者は教えてくれます。

では「詩篇37篇」の「貧しい者—(柔和な者)」とは、どういう人なのでしょう。この「詩篇」を生み出したユダヤの人々は、大国によって脅かされ、国に攻め込まれ、しばしば翻弄されました。人々は激しい憎しみに駆られました。しかし「詩篇37篇」は、そこで「柔和」について語るのです。ここの「貧しい者—(柔和な者)」は、「彼に敵対する者がいて、彼に悪をしかけて来る。しかもその敵対する者が繁栄していて、神の民が苦しい経験をしている」状態です。彼は欠乏しています。時には「なぜ彼の方が—(あの国が)—繁栄するのか」と妬みが起こるような状況もあるのです。逆境にある。その信仰者に対して「詩篇37篇」は「腹を立てるな、妬みを起こすな、憤りを止めよ、善を

行え」と語ります。それで信仰者は、逆境の中でじっと耐えるのです。しかし「詩篇」は、じっと耐えることを教えるだけでなく、何よりも大切なこととして、「貧しいが故に、欠乏がある故に、逆境故に、しかし自分は耐えて、善を行い、そして神を待ち望む」、そのような生き方を教えます。「5節」には「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩篇 37:5)とあります。そのように生きる時、「37篇9節」には、「しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう」(9)とあり、「11節」には「しかし、貧しい人—(柔和な人)—は地を受け継ごう。また豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう」(11)と語るのであります。さらに「37篇」の最後には「正しい者の救いは、主から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。主は彼らを助け、彼らを解き放たれる」(39~40)と教えられています。つまり、そのような生き方をする時に、やがて「主が地を受け継がせて下さる—(主が祝福して下さる)」と言うのです。「柔和な生き方」がこのような意味として教えられ、勧められ、そしてその祝福が語られます。イエスも、「詩篇 37篇」で語られている信仰者の生き方の原則を語っておられるのだと思います。「弱く、貧しく、時に理不尽と言えるような状態に置かれ、怒りたい、腹が立つ、腹を立てたい、あるいは『なぜあの人ばかり…』と妬みのような感情さえ起こって来る…たとえそのような様々な逆境の中にあっても、腹を立てずに、耐えて、善を行なう、善を生きる、そして神を待ち望む、『貧しさ』の中で、なお神に望みをおいて生きる人こそが、地を受け継ぐ、主の祝福に与るのだ」と、そう語られたのだと思います。

なぜそうなのか。それは、そのような生き方こそ、正にイエス様が見せて下さった生き方でした。「マタイ 11章 28~30節」にこうあります。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎが得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタイ 11:28~30)。ここに「わたしは柔和…だから…わたしに学びなさい」とあります。「柔和な生き方を私から学びなさい」、「そうすれば…安らぎが得られる—(癒される生き方が得られる)」と言われるのです。この御言葉は、私達に「イエスの柔和さを学ぶように」と強く勧めるのです。そしてその通り、イエスは柔和な方として生きられた方でした。イエス様が生きられた当時も、ユダヤの民は、外国人に国を支配された悲しみや憎しみの中に生きていました。その中で、ある人々は、力づくで国を回復しようとしていました。そして人々は、宗教家として知られるようになったイエス様にも、そのような力づくのリーダーであって欲しいと願い、イエス様をそのようなリーダーに仕立てようとしてしました。しかしイエスは、力に—(暴力に)—生きようとはされなかったのです。「柔和」に生きる道を選びました。神の御心にかなう国は、暴力では、力づくでは造られないからです。イエスは、力を捨てて、神に信頼し、神を待ち望んで、善を行ない—(愚直に善を行ない)—「柔和」に生きられました。また、重荷を負い、呻くような生活をする者には、その魂に平安を与えるような生き方をされました。その「柔和」に生きるイエス様を、力づくの世の中は、受け入れることが出来ませんでした。イエス様を潰してしまったり、殺してしまいました。しかしそのイエス様を、神様が甦らせたのです。神様は、イエス様を潰した力づくを、暴力を、全く虚しいものとされました。そしてイエス様は、神によって「柔和に生きる者の勝利」を得られたのです。神が勝利させて下さったのです。

神に信頼し、神を待ち望み、逆境に耐えて、善を行なう、善を生きる、イエス様は、私達に「その生き方を学べ」と言われます。その時に「地を受け継ぐ」と言われるのです。この「地を受け継ぐ」という言葉がどういうことなのか。主の再臨によって「新しい天と新しい地」(黙示録 21:1)が現れる、その時に「新しい地」において豊かな報いを受ける、豊かなものを受け継ぐ、そのような意味もあるかも知れません。「それが本質だ」と書いている注解書もあります。しかし同時に、「詩篇 37篇 11節」には「柔和な人は地を受け継ごう。また豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう」とあるのです。つまり、私達の現実の生活、私達が悩んだり、呻いたりしているその生活の具体的な場において祝

福を受ける、そういう意味でもあるのではないのでしょうか。だから「柔和に生きる、それは現実の生活を生きる上での祝福の生き方」でもあるのです。

私はここまで学んで、マーチン・ルーサー・キング牧師の姿を思い出したのです。ご存知の通り、かつてアメリカ社会は、白人による黒人差別という病気に病んでいました。キング牧師は、その差別の撤廃運動に立ち上がります。人種差別の撤廃を求める「公民権運動」を指導しました。世に正義を訴えたのです。困難な戦いでした。しかしキング牧師の運動が、どうして成功したのか。白人は権力にものを言わせて、力で、暴力で黒人を抑えつけようとします。キング牧師自身も家に爆弾を投げ込まれたりしました。でも彼は、怒りに身を任せません。彼は言います。「正義の闘いは、正義の方法によらなければならない」。彼は、逆境に対して善を行なう、暴力で対抗しないのです。むしろ白人に対する愛さえもって運動して行くのです。その姿に、やがて白人が良心を呼び覚まされて行きました。黒人差別の撤廃を求めるデモに、白人が参加して行くのです。白人と黒人が手を取り合って歩くようになります。黒人が怒りに駆られて「反白人」という運動をしたら、こうはならなかったと思います。ワシントンで行われた有名な演説でキングは言いました。「私には夢がある。将来いつか、幼い黒人の子ども達が幼い白人の子ども達と手に手を取って兄弟姉妹となり得る日が来る夢が…。そして「この信仰を持って私達は南部へ帰ろう」と言いました。「夢」は、神がおられる時に「希望」になるのです。聖書に「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい」(ローマ 12:17)とあります。その御言葉を生きるのです。柔和を生きる。彼の中には「神の御心に適った道であれば、それは神が為し遂げて下さる」、その思いがあったのだと思うのです。だから「柔和」を生きました。その結果、1964年、人種差別を禁止する「公民権法」が成立しました。今もアメリカには、人種差別があるようです。しかし一方で「世界で一番人種差別に敏感な国民はアメリカ人だ」という言葉も聞きます。彼らの運動が「地を受け継ぐ」のです。生きる現実において、彼らは祝福を経験しました。いずれにしても、「柔和」に生きる、それこそが祝福の原則であることを教えられます。

しかし「私達の現実の生活、私達が悩んだり、呻いたりしているその、生活の場において祝福を受ける」ということは、逆に言うと、どういうことかということ…。良く「サンデー・クリスチャン」等という言葉が使われることがあります。日曜日には教会用の顔になり、いわゆる「クリスチャン」になり、月曜日から土曜日にはまた別の顔になる。「日曜日だけのクリスチャン」、そのような意味の言葉です。私も—(随分前ですが)—「夫婦喧嘩はウィークデイにしよう」と考えていた頃があります。日曜とウィークデイを使い分ける自分がいたのです。

もちろん実生活を営んで行く中で、「力」を用いないで生きて行くことは難しい、現実の人間関係の中で柔和な顔ばかりをしてはいられない、そういう現実もあるでしょう。しかしイエスが「柔和な生き方」を説かれた時、「柔和であれ」と言われた時、「地上の生活で祝福を受ける」と言われた時、それを聴く私達—(イエス様を信じ、イエス様に従おうとする私達)—は、「柔和さ」を日常化—(月曜日から土曜日化)—することが期待されていると思うのです。場所によって、状況によって使い分けるのではなくて、生活全般の中で、生き方を通して、「柔和」を、具現化する必要があるのだと思うのです。それがこの箇所のチャレンジだと思えます。

しかし、そのために大切なこと。それは、イエス様が生きて見せて下さったように、信仰的な柔和さは、神を信じるところから、神を信じ切る—(神に結果を任せる)—ところから来るということです。逆に言うと、私達が「柔和さ」を失うのは、「神になんか任せてられない」と思う時ではないかと思えます。それである注解書にこうありました。「柔和さの問題は、私達の度量の問題、心が広いとか、狭いとかの問題ではない。信仰か不信仰かの問題である」。モーセは、神と共に歩いていました。だから神に委ねることが出来たのです。神の前に無力な罪人であるのに赦される恵みを知り、自らの罪深さを悲しむ者を受け入れて下さる神の憐みを思う時、私達は神に委ねるようになるのではな

いでしょうか。そして「柔和」を生きることが出来るようになるのではないのでしょうか。

「柔和」に生きることを選んだがために、損をしたり、悔しい思いをしたりすることがあるかも知れませんが、「これは…こうするのが、こう言い返すのが当たり前ではないか…」と思うようなことでも腹を立てない、善を行なう、そういう苦しい戦いをしなければならないこともあるかも知れません。でも、そこで私達はイエス様の言葉を聞き続けるのです。「柔和な者は幸いです。その人は地を受け継ぐから—(その人はやがて神の祝福を経験するから)」(5)というイエス様の言葉を聴き続ける。「わたしの軛を負い、わたしに(柔和さを)学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎが得られる」(マタイ 11:28~29)という言葉聴き続けるのです。「柔和」に生きようとして味わう辛い思いは、主が慰めて下さると信じるのです。「柔和」に生きる、その結果は、神が祝福で仕上げて下さると信じるのです。その信仰の闘いの中で、私達も「柔和な者」として生きる恵みを少しずつ経験する者とされて行くのではないのでしょうか。この地を治めておられるのは神様です。私達の祝福は、地—(全世界、私達の全て)—を支配しておられる神から来るのです。その神から来る祝福にこそ期待し、主を待ち望む、それこそが私達の信仰です。お1人びとり、生きる現実に逆境があると思います。悲しみがあり、試練があり、また腹が立つことがあると思います。しかし、この言葉を語られた主は、生きておられます。だから、そこで私達は「柔和な者」として生きて行きましょう。忍耐し、神に期待して、善を行ない、やがて「地を受け継ぐ」—(「その場を支配する」、「祝福がある」)—と約束して下さる神の祝福を経験させて頂きましょう。

最後に、マザー・テレサの詩をご紹介します。

「人は不合理、非倫理、利己的なものです。気にすることなく、人を愛しなさい。あなたが善を行くと、利己的な目的でそれをしたと言われるでしょう。気にすることなく、善を行ないなさい。目的を達成しようとする時、邪魔立てする人に出会うでしょう。気にすることなくやり遂げなさい。善い行いをしても、おそらく次の日には忘れられるでしょう。気にすることなく、し続けなさい。あなたの正直さと誠実さがあなたを傷つけるでしょう。気にすることなく、正直で誠実であり続けなさい。あなたが作り上げたものが壊されるでしょう。気にすることなく、作り続けなさい。助けた相手から恩知らずな仕打ちを受けるでしょう。気にすることなく、助け続けなさい。あなたの中の最良のものを世に与えなさい。けり返されるかも知れません。でも気にすることなく、最良のものを与え続けなさい」(マザー・テレサ)。